

【酒井】 それでは続いて、佐山さんにお話をお願いしたいと思います。

われわれも、何かこれから活動をしていこうといったときに、われわれのメンバーだけでは、できることが限られてくるでしょうし、縁、コラボレーション、協働ということが、どうしても必要になってくるとおもっています。

われわれも要請されて参加することはあったんですけど、あまりこちらが主催して参加を要請するという経験は多くはないし、また、そういうことをしようとすれば、非常に難しい面もあるかと思っております。佐山さんには、そういったご経験をお話していただきたいということでお願いしております。よろしく申し上げます。

## 『人の輪』づくりを通じた活動を続けて～その必要性と難しさ』

みずとみどりの研究会 佐山公一

ご紹介いただきました、みずとみどり研究会の佐山と申します。「『人の輪』づくりを通じた活動を続けて」という難しいテーマをいただきまして、私自身、あちこちに顔を出しているのです、そういった点でいろいろなお話ができるのかと思い、講演を受けさせていただきました。

今回、このお話を受けさせていただいたのは、下水道展でいろいろな方々と知り合っ、お声かけをいただいたという、そんなつながりもあり、まさにそれが人の輪づくりの始まり、きっかけになると思っています。

また、私自身が、これからお話しする内容の中にありますけれども、本当にいろいろなところに顔を出させていただいて、ネットワークを形成できたことで20年近くになりますので、そんなお話もさせていただきたいと思います。

### 生い立ちと「みずとみどりの研究会」への参加

最初に、私自身がいったいどんな人間なのか、簡単に触れさせていただきます。

私と川との関わり。東京都足立区の西新井大師のすぐ近くで生まれ育って、住んでいますけれども、足立区内は荒川、綾瀬川、毛長川、隅田川に囲まれていて、真ん中にはまったく水路、水辺がないのですけれども、私が子どものころは水路が縦横に結構ありました。溜め池、池、沼もたくさんあって、定番のザリガニ釣りとか、フナを釣って、持って帰って水槽の中に入れる、そんなことをやっていました。

小学生ぐらいになると、父親の実家、渡良瀬のほうにある巴波川（うずまがわ）で、夏休みの期間、ずっと1カ月近く滞在しました、一応、夏休みの宿題をやらなければいけないので、宿題を持って行きました。原体験として、小学校のときに、巴波川で川浴をするじいさんとか、おじさんが鯉を素手で捕まえたとか、そんな経験をして、「すごいな、川って面白いな」と感動しながら。1人で、親から離れてじいさんの家に泊まり込んで、1カ月近く遊びができるようになったのが3年生ぐらいからで、小学校6年まで3年間ぐらいは、巴波川で遊んだ記憶があります。日常では、先ほど申しあげました足立区のあちこちで悪さをしながら、魚釣り、ザリガニ釣りをやっていました。

高校時代になりますと、通学路の近くに綾瀬川があり、日本でワースト1、2の水質のよくない川ということでよく名前が挙がる川です。通学の自転車でここを通ると、変なおいがしますが、そういった川を見ながら毎日通学していました。そんなことが学生時代にあっ、川との関わりは、とても興味関心のあることでした。

それらを経て、1回は社会人になりましたが、やはり川とか環境に関して、当時は環境問題というより公害と言っていて、それをなんとかしないといかんというような気持ちはありましたけれど、一般企業に勤めました。その時も、実は、環境分析などそういったことに関わりたいたと思いましたが、ちょっと違う方向に行きました。

仕事では主に金属バケガク(化学)を学び、化学分析もやりつつ、いろいろなことを学ばせていただいて、社会人を辞めて、専門学校に入り直しました。環境や生き物の調査方法を学んでいましたが、その当時、学んでいた学校の講師が、当時、みずとみどり研究会の事務局長でした。私が今、所属している市民団体ですが、「フィールドワークや勉強会に参加しないか」ということで、参加させてもらったのがきっかけで、通うようになりました。

そのあと、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、私は「身近な水環境全国一斉調査」という全国の市民に呼びかけて行う水質調査の事務局を20年近く続けています、それをやるのに、みずとみどり研究会の事務局に入りました。

### みずとみどり研究会・原則とルール

みずとみどり研究会というのは、とても素晴らしい理念といろいろな方々が関わっています。市民だけではなくて、行政の方、企業の方、研究者の方、本当にいろいろな方が同じテーブルで話し合います。その際、3つの原則、7つのルールを取り決めています。

「自由な発言」、「徹底した議論」、「合意の形成」という3つの原則、それぞれに基づいて、7つのルールが決められています。

- ① 参加者の見解は、所属団体の公的見解としない
- ② 特定個人・団体のつるしあげは行わない
- ③ 議論はフェアプレイの精神で行う
- ④ 議論を進めるに当たっては実証的なデータを尊重する
- ⑤ 問題の所在を明確にしたうえで合意をめざす
- ⑥ 現在係争中の問題は客観的な立場で事例として取り扱う
- ⑦ プログラムづくりに当たっては長期的に取り扱うものおよび短期的に取り扱うものを区分し、実現可能な提言を目指す

というのが7つのルールです。誰かをつるし上げたり、批判したりしない。議論するに当たっては、感情的にならずに、科学的にきちんとしたデータをもとにお話をしましょうという内容です。

特に、当時(ルールのできた1994年ごろ)、行政の方が迂闊なことを言うと、これが市や自治体の意向だということ言われてしまうのが怖いから言わないということがありました。それはそれとして、個人の見解としてはどうなのかということ話し合うのに、やはり意見を聞き出したいわけです。きちんとルール決めをして、話し合いを、みんな平場のところでやりましょうと、みずとみどり研究会ではずっと進めてきています。このルールはとてもいいなと思いつつ、私も仲間に入ってから、こういったルールを守って会議等に参加しております。

そういった活動を続けているわけですが、みずとみどり研究会は、いろいろな団体に所属している方が集まっています。研究者の方もそうですが、市民の方だと、荒川のほうで活動している市民団体の方、武蔵野地域、多摩地域の緑や水、まちづくりのような市民団体に入っている方も、みずとみどり研究会が駆け込み寺的に、皆さんが環境に関するいろいろな相談をできる場として活動しています。そういった

ポジションで、みずとみどり研究会はあるので、私自身も市民活動を進めていく上で、いろいろなところで人のつながりができてきました。

### 多様なネットワークへの参加

その中で、例えば、多摩川流域ネットワーク（通称 TB ネット）があります。多摩川流域は、各地、上流から河口までいろいろな市民団体がいます。それをネットワークとしてつないでいこうという、十数年来のネットワークがありますが、その事務局としても関わらせていただいています。その市民ネットワークの中から私も含め数名が多摩川流域懇談会に参加しています。

この多摩川流域懇談会とは何だろうということになりますが、京浜河川事務所が事務局となり、流域の自治体と市民、最近では研究者も入って頂いています。あまり多摩川に興味がない方、普段は多摩川に足は向くけれども多摩川自体の川づくりについて興味関心がない方、彼らにどうやったら興味関心を持ってもらえるかを考え、様々なセミナー、例えば、多摩川というキーワードをもとに歴史のセミナーを開いたり、みんなで話し合っ、「今度、こういうことをやってみようよ」ということを行っている組織です。

ほかにも、野川流域連絡会(以下、流連)にも参加しております。多摩川の支流である野川、こちらも東京都が事務局になっていて、流域の市民の方、自治体の方が、野川について、川づくりをいろいろ話し合う場としています。

現在は、みずとみどり研究会の中で、地下水保全プロジェクトということで、会自体が野川の流域の湧き水調査をやっています。野川流域の湧水なので、流連とコラボできないかと考え、このあとお話しされます清水氏にも湧水調査に関わって頂き、市民で水質、生き物、水量などを調べるなど、流連との連携を取りつつ、市民活動をおこなっています。

他にも、全国川ごみネットワークにも所属しています。もう一つ、人と人をつなぐということであれば、ここには書いていませんが、他団体であります全国水環境交流会が主催している、いい川・いい川づくりワークショップにも参加しています。これは、全国の川づくりに関心がある市民や行政マンが一堂に会して、いろいろな「いい川」、「いい川づくり」をするための話し合いをする場が年に1回ありますけれども、そのお手伝いとして個人的に参加させていただいて、全国の市民の方とのネットワーク、関わりをもたせていただいております。

さらに、全国雨水ネットワークとか、官民連携の東京湾の一斉調査にも関わらせていただいて、とにかく人とのつながりを大事にして活動を続けております。

### 身近な水環境全国一斉調査

その中で、冒頭にお話しました「身近な水環境全国一斉調査」が、私のメインの仕事です。仕事といっても市民活動、ほとんどボランティア的なもので、これで食べていくはずのお話がなかなか厳しい状態で、ほとんど収入になっていないのですが、これを専従でやっている身としては厳しいです。けれども、その話は別として、全国の水質調査を市民に呼びかけて楽しみながらやっています。

この調査のサブタイトルとして、「笑顔でつなぐゆたかな水辺」とありますけれども、サブタイトルにも大きなテーマという気持ちがこもっています。

全国で一斉に水質調査を、市民の方や行政の方などに声をかけていますが、例えば北海道で、1人で水質調査を続けてくださっている方、東京でやっている方、色々な方がいらっしゃいます。だんだん、毎年やっているとな一人で寂しいなと思うかもしれませんが、全国の同じ空の下で、面的に、各地で調査を

した結果が、最終的には日本地図 1 枚の上に落ちてくるという、点である調査が面につながっていくという、「笑顔でつなぐ」とは、そのようなことです。

もう 1 点が、次世代につなぐ。きれいな水辺を次世代につないでいこうよという思いも含めて「笑顔でつなぐ」ということをやっています。まさにそれが、人の輪づくりに関わる水質調査になればということで、20 年近く調査をしています。

その調査をやっていく上で、やはりいろいろなところと連携をとっていかないと、つながり、発展がないので、市民団体同士の理解と参加が大事です。水質調査を全国で展開していく上で、全国各地の市民団体の人に「コアになってくださいね」ということで、ここに書いてあります市民団体の実行委員会を設置し、委員になっていただいて、発信拠点になってもらうということです。あと、市民自らが継続的な調査をすることによって、水への理解、川への環境への理解を深めるきっかけになってほしい。それについて分からないことがあれば、私が答えさせていただく。本来ですと、事務局は何人もいて、それぞれ対応するわけですが、専従が私しかいないので、全部の方から私に問い合わせが来るわけですが、つらい分、私にもいろいろな情報や知識が蓄積できているメリットもあることもお話しさせていただきたいと思います。

一方、河川管理者、各市との連携は、市民と行政という面もありますし、市民と事務局関係とのネットワークでもあります。河川管理者、各行政とのやりとりも、地域同士ということもありますし、地域と全国調査の実行委員会であったりもします。事務局とこのような連携もあって、とにかく皆さんとつながっています。

その中には企業も入っています。パックテストを提供している共立理化学研究所という企業さんは、この調査の意義を十分理解して、パックテストをご提供してくれていますし、全国規模の企業さんも、「社員には、環境に関心を持ってもらいたいので、水質調査に参加させたい」と。実は昨日も、ある企業の社員さんにお話をさせて頂きました、そんな機会もあります。

そんな調査を 18 年、今 19 年目なので 19 年目はまだ集計できていないのですが、18 年間で調査した団体さんがこんなにいらっしゃいますということですね。4,400 団体、北海道から沖縄までの方々がエントリーしていますけれども、この中からだいたい毎年 1,000 団体近くに参加していただいています。私自身は、参加団体同士の活動をつなぐ、参加者同士をつなぐということをやっています。

### 一斉調査・継続の課題

つなぐことに関しても、課題等があります。市民団体メンバーの高齢化です。全国各地で環境問題が起きたときに市民団体があちこちで発足されたのですが、その方々が 20 年、30 年経ってくると高齢化し、若い人がなかなかいない。今、水環境に関して良くなっているので、親水という意味合い、水に親しむ方のところで活動に入ってくれる方は若干いらっしゃいますが、若い人たちが環境問題としてどう取り組んでいったらいいのかが明確でないので、入ってくれる方が少ないなというのが私の印象です。

そういったことがあって、活動自体、これまで活動してくださっていた団体さんの縮小化が起きているという印象があり、少し残念なところではあります。

しかし、これをどうにかしていこうと手をこまねいているわけではなくて、例えば、川で楽しく SUP (サップ; スタンドアップパドルボード) をしている人たちと水質調査、もしくは川でのゴミ拾いであったり、そんな人たちをつなげていくこともやり始めているので、そういったことも皆さんにご紹介できればと思っております。

人の輪づくりを通じた活動ということで、簡単ではありますけれども、こんなかたちで 20 年近く市民

活動をやっておりますので、何かの参考になればと思います。どうもありがとうございました。

【酒井】どうもありがとうございました。先ほど、全国の相談を受ける立場で、つらいこともあるとおっしゃったのですが、例えばどんなことがありますか。

【佐山】休みも時間も関係ないのでですね。本当に24時間、いろんな方がいらっしゃるの、熱心に、夜遅くにでも電話がかかってくる、メールがあつたりすると、相談に乗ったりします。メールであれば、翌日回答するのですが、電話がかかってくる、ご自身の思いが多くて30分も40分も話を聞いている、そんなこともあります。

つらいというのは、水質調査をすること自体が、水環境をきれいにするに直接はつながらないのです。「川でここ10年、調査しているけれど、水質はよくなるんだよね」というふうに言われる方がいらしたので、実はそれは気づきであったり、その方自身がいろんなことを知っていくための一つのきっかけであって、それからまたアクションを起こして、例えば行政の方に、この水質が悪いのはどうしてかということを知り、みんなと一緒に排水を変えたり、自分の生活スタイルを変えていただくことにつなげていくのが本来の水質調査の意図であり、方向性であろうかと思うのですが、ちょっとご理解いただけなくて、「じゃあ止めちゃう」という方もいらっしゃるのが事実ですね。

あまりマイナスなことばかり言っても仕方がないですけども。その方自身も、いろいろ悩まれていると思います。私のほうで、「じゃあ、この課に行って、こういうことをお願いしてみたら」くらいしか言えなくて、それが直接うまく動けるかどうかというと、できないんですよ。私も、もどかしい部分もあって、なんとも言えないところがあります。

【酒井】そうですね。水質調査の結果が、そういった人たちの次の行動につながるというのとは思いますね。ありがとうございました。では、ご質問をどうぞ。

【佐藤】東京で活動しています佐藤と申します。佐山さんとは以前からお付き合いしていました。佐山さんが言われたように、環境問題から発展したいろいろな活動団体があるけれど、その方々が高齢化して、あとを継ぐ人がいないということが非常に大きな問題になっています。私のほうでは、あまり研究活動などはしていませんが、実は、川に子どもたちを呼んで遊ぼうということで活動を始めて、かれこれ20年になります。最初は、「保護者同伴で来い」と言ったら、来たお母さんが怒っていたのですが、今は、むしろ怒っていたようなお母さんが率先して川の中へ入っていく。「下着まで濡れちゃったわ」と言いながら、喜んで入っています。そうすると、子どもが喜んでいる感情を、親はあるいはその関係者は汚すはずがないので、ポスターや呼びかけを多くするよりも、みんながそこで遊んでいる姿をほかの人に見せるという活動を通して、川の改善なり、川の水質の浄化を進める。と同時に、眺めている人たちはものすごく羨ましそうな顔をしているんですね。そういう川の活動を通してやっていることを、午後の発表でお話ししたいと思います。

【佐山】ありがとうございます。まさに、そういった子どもたちが、私の原体験のお話のときのように、何か川への思いが繋がってというか、保全の活動につながっていくことになるのかなと思います。

余談になるのですが、この水質調査に参加してくれた子は、科学、環境調査に関心を持って、大学に入って、その後、コンサルタントになり、環境調査に関わるようになったという、そんな話も20年の間には出ているので、まさに今の佐藤さんのお話のように、小さな子にいろんなことを経験してもらおうとい

うのは大事なことを思っています。